研究発表

『佳人之奇遇』における范卿という人物をめぐって

陳（チン）　華栄（カエイ）

一　はじめに

『佳人之奇遇』は明治政治小説の代表作として、全世界を舞台として構成された小説である。明治18年から30年にかけて刊行された『佳人之奇遇』は当時のベストセラーとなり、明治期の政治小説の中で、最も広く読まれたものと言われ、当時の若者に非常に人気を得た。作者の東海散士（柴四朗 1853-1922）は会津藩出身で、明治から大正期に活動した政治家である。主な内容としては、アメリカに留学している会津の遺臣の東海散士が、アイルランドの美女紅蓮、スペインの貴女幽蘭と中国の明朝の「遺臣」の范卿と出会い、この四人の交情の話と当時の世界における弱国の強国の抑圧行為に対する「抵抗」に関する物語である。

1898年に、梁啓超（1873-1929）などをリーダーとする変法運動は保守派の抵抗で失敗し、梁啓超は日本への亡命生活を余儀なくされた。日本へ逃亡する時乗った船で、彼は『佳人之奇遇』と出会い、この作品が非常に気に入り、読みながらすぐ翻訳し始めた。同年の12月に、彼は横浜で『清議報』という雑誌を創刊し、その中で「政治小説」というコラムを設け、翻訳した『佳人之奇遇』を『佳人奇遇』という題名で連載した。『清議報』に『佳人之奇遇』を12回まで連載したのちに中断し、その後は同じく政治小説の『経国美談』を『清議報』に連載した。『佳人奇遇』はそれまで政治小説というジャンルがなかった中国に大きな影響を与えた。

この小説の主な登場人物は日本人の東海散士、アイルランド人の紅蓮、スペイン人の幽蘭と中国人の范卿となり、范卿はこれらの人物の中での唯一の中国人（清国人）である。政治家である原作者の東海散士は小説の登場人物たちを通して自分の政治思想を訴え、范卿という登場人物も大きな役割を果たした。同じく政治家である梁啓超が翻訳した時には、自分の政治立場によって、范卿の言論を含め、『佳人之奇遇』の多くの部分を改作している。

中国における『佳人之奇遇』に関する研究は少ない一方、日本では『佳人之奇遇』の研究の蓄積は多いが、その大部分はこの小説における政治思想や国権主義などについての研究で、中国語訳や中国人登場人物の范卿に関する研究は比較的少ない。本稿は『佳人之奇遇』における范卿に関する記述とその翻訳を手がかりとし、作者が范卿という人物をどのように作り上げたのか、訳者は翻訳する際に、どのように范卿に関する内容を処理し、この登場人物の人物像を変化させたのかということについて考察を行いたい。

二　原文における范卿という人物

1）清国人の地位について

范卿はアメリカに亡命する清国人として設定されるので、当時の清国人の国際的地位はこの人物の設定において極めて重要な問題となる。作者もこの問題を重視しているようで、『佳人之奇遇』においていくつかの箇所での描写から当時の清国人の地位を窺い知ることができる。

第二巻において、范卿が自分の身分について紹介した後に、自分のアメリカでの亡命生活について文句を言う場面が引用１のようになっている。

引用１　今や米人の我を嫌悪する、虺蚺蛇蝎の如く、我を蔑視すること黒奴よりも甚し。是れ諸君の熟知する所なり。加之ならず、輓近米政府、令を発して清人の来航を禁止するに至れりの権利を重ずる米人の、施行する政策なりと稱誉することを得んや。

当時のアメリカには20万人に及ぶ出稼ぎ華僑がいたが、低賃金で働かされるなど、人権が守られているとは言い難い状況にあった。清政府はこの状況を知りながらも、アメリカに遠慮して特に問題として取り上げずに傍観していた。1879年に華僑を雇用することを禁ずる法律や華僑入国を制限する法律が施行されるなど中国人排斥運動が高まると、トラブルに見舞われる華僑も増加したそうである。引用１において、清人が米人に嫌悪され、蔑視されることや、米政府が清人の来航を禁止することなどは当時の社会の現実だと言える。

第三巻において、散士は波寧流女史を訪問する過程についての記述がある。女史の婢に「女史病て床に在り、賓客に接する能はず。況や、新来足下が如き者をや」と言われ、散士は「心其不敬を憤り、将に其面に唾せんとす」と怒ったが、またすぐに引用２のように自分を慰める。

引用２　且愛人常に清人の己に利なきを悪む久し。今彼、余を認めて、清人と誤るの致すところどころなるなからんやと。

引用２で示しているように、散士は、女史の婢の自分に対する無礼の原因は、自分を清人と勘違いしたためであると推測した。言い換えると、相手は自分が日本人だと分かれば、そのような無礼な態度を取るはずがない。当時の清人はよくいじめられ、そのようなことは頻繁に清人の世界で発生することが窺える。

そのようなことが起こったので、散士は帰ることにし、停車場に行って汽車の出発するのを待つ。そうすると、

引用３　時に愛人[1] 數輩あり、亦来て散士の旁に倚る。弊衣垢顔、年皆二十五六、相共に散士を指目して嘲笑し、或は高く呼て辮髪の賤奴となす。

引用３にあるように、停車場にまた散士を辱める数人の愛蘭島人がいた。彼らは散士を指して、「辮髪の賤奴」と高く呼んで嘲笑した。周知のごとく、清は

明を滅亡した後に、漢民族にも「薙髪令」を1645年に出し、辮髪を強制した。儒教では毛髪を含む身体を傷付ける事は「不孝」とされるため、漢族は辮髪導入に抵抗したが、清朝は辮髪を拒否する者には死刑を以って臨み「頭を残す者は、髪を残さず。髪を残す者は、頭を残さず」と言われた。『佳人之奇遇』の舞台である19世紀には辮髪は完全に普及し、「中国的な風習」と見なされる様になった。したがって、引用３に現れた「辮髪」ということは当然清国人のことを指していて、散士は清人と勘違いされ、辮髪の賤奴と嘲笑されたのである。

このように、その時代に、清国人と同じくアジア人の散士まで勘違いされ、清国人として嘲笑されるほど、アメリカにおける清人の地位はかなり低いものである。それは『佳人之奇遇』における清人の登場人物の全体的な背景となる。このような背景において作り上げられた清人の登場人物である范卿の人物像はどのようなものだろうか。次の節でそれについて考察してみたい。

２）范卿の人物像

范卿は東海散士、幽蘭、紅蓮と同じく、原作の第１巻に登場する。范卿の登場場面は引用４のようになる。

> 引用４　①清人あり、杯盤を周旋す。其應對挙止の凡ならずして尋常に異なるを観る。齢、大凡五旬を超ゆ。幽蘭・紅蓮の談を聞き、眉宇激するが如く、傷むが如く、襟を正して進み幽蘭を揖して曰く、②今にして初めて両嬢は国家の忠臣烈女なることを知れり。③老奴も亦④亡朝の孤臣、漫に自ら料らず、⑤前朝の回復を志すものなり。特に怪む、今者忠義の人、期せずして此に會合すること。⑥幽蘭驚て席を命じて曰く、⑦噫子も亦亡朝の遺臣なるか。真に奇遇と謂う可きのみ、願くば詳に之を語れと。

この部分の内容からはいくつかの点が明らかになる。

１　まず傍線①③⑥から、范卿は清国人で、幽蘭、紅蓮の召使で、主人たち

はお客様と話す時に、范卿は席に着くことができなく、身分が低いということが分かれる。

2　傍線②から、幽蘭、紅蓮は散士と初対面であるが、自分の身分や隠逸などについての話をするのに対して、范卿は幽蘭、紅蓮の召使として、二人と付き合う時間はより長いはずであるが、そのような話は聞いたことがない。初対面の散士を信頼するのに対して、范卿は幽蘭、紅蓮に信頼されていないということが読み取れる。

3　傍線④⑤⑦から、范卿は明の遺臣で、自分のことを「老奴も亦亡朝の孤臣」と言う。明朝の回復を志している。

しかし、この中では不適切な部分があると思われる。まず孤臣と遺臣の意味について見てみよう。

孤臣は日本語にない単語であり、中国語の意味を訳すと重用されていない孤立無援の臣、又は前朝が滅亡しても前朝に忠誠を尽くす老臣のことを指す。

遺臣は『大辞泉』によると、1 先代または前朝に仕えていた旧臣。2 滅亡した国・藩などの家来のことを指す。

中国明朝の滅亡は1644年であり、この小説の時代設定は1885年で、范卿の年齢は「大凡五旬を超ゆ」と設定されているので、明らかに范卿は明朝に仕えていたことはないと思われる。したがって、明朝の遺臣という范卿の身分設定は、作者が「遺臣」という言葉を使い間違ったのではないかと考えられるだろう。

4　傍線⑦からは、范卿も幽蘭、紅蓮に自分のことについて話したことがないことがわかる。慎重な性格で、他人を簡単に信頼しないタイプと言えるだろう。傍線⑥と⑦で示したように、幽蘭は驚いて范卿に詳しく説明しなさいと話を聞かせた。すると、幽蘭の要求に応じて、范卿は自分の生い立ちや米国に亡命するまでの経歴を話し始めた。

引用５　清人が曰く、僕姓は鼎、名は泰璉、范卿は其字なり。明の名臣瞿式耜が將、鼎璉の後なり。明の末造、清兵大舉して西に下る。向ふ所瓦

解し、過る所風靡す。明の名將史可法、揚州に戰沒せしより、江淮復た勤王の師なし。式耜、何蛟勝、孤軍を提げて僅に粤西を保つ。璉、久く桂に將として大に桂人の心を得たり。會々清兵、桂を攻む。璉、式耜と奮戰して、遂に清の大軍を退く。…嗚乎吳を沼にするの志、空く蹉跎し、悠悠たる日月留む可からず。我老蔣に到らんとす、嗚乎哀い哉と。

范卿は自分の名前を紹介した後に、二千字あまりの長さの内容で清の軍隊が明朝を侵略する残酷な行為と、「反清復明」運動の失敗、自分の父や姉が殺されたこと、自分がやむを得ずアメリカに亡命することになった過程などについて詳しく話した。引用５はその話の一部分になる。范卿の名前と身分について、傍線の箇所で示しているように、名前は鼎泰璉で、字は范卿、明朝の名臣瞿式耜の将軍の鼎璉の後人である。

この部分にも興味深い点がある。まず瞿式耜という人は歴史上実在していた人物で、この長い話の中で出た多くの人物、例えば史可法、鄭成功、呉三桂などは全部実在していた歴史人物である。しかしながら范卿の先祖鼎璉は、瞿式耜の將軍として設定された以上、有名なはずだが、史料を調べてもその身分が確認出来ないので、瞿式耜と一緒に反清活動に参加した人を原型に作り上げられた虚構の人物の可能性が高いと思われる。范卿の場合も、名前である「鼎泰璉」と字の「范卿」のいずれを調べても予想通りに関連資料が見つからない。

次に、范卿の名前について、鼎泰璉の璉と先祖鼎璉の璉は同じ字を使っている。古代中国では、名前を作る際に、皇帝の名前はもちろん、自分の先祖の名前に使われた文字をも避ける必要があり、そのため子が生まれると、族譜を引用し、先祖の名を確認してから、先祖の名に使用されていない文字で命名を行う、いわゆる「避諱」という習慣がある。それに対して、平安時代中期、漢字二字からなる名が一般的になってから後の日本では、「通字」、あるいは「系字」といい先祖と子孫の間で同じ漢字一字を継承する習慣が見られる。したがって、鼎泰璉という范卿の正式な名前の設定は、中国の避諱という風習を違反するこ

とになっていて、むしろ日本人の名前作りの習慣に従っているように見える。これは范卿という中国の登場人物の設定において大きなミスだと考えられるだろう。

范卿のこのような英雄らしいかつ悲惨な話を聞いた後に、皆の反応はどうだろう。まずは散士の反応として、引用６のようになる。

引用６　散士聞く毎に激昂悲痛胸臆を攪し、默然として語なく、長太息して涙を掩ひ、人生の艱多きを哀む。

このような散士の反応は、ごく人道的、人情に合うものだと考えられるが、しかしながら、そのすぐ後に、引用７のような幽蘭の反応が描かれていた。

引用７　幽蘭、謝して曰く、郎君幸に恕せよ、春風駘蕩快楽の陽場を變じて、秋風蕭殺悲哀の陰観と為し、郎君を怏怏として楽まざらしむ、是れ妾が罪なり。今や貴国舊政を釐革し…妾等、国亡び家破れ、辛苦万状他邦に流寓し、故郷を懐望して、寤寐忘るゝこと能はず、言談悲痛の事に度り、以て郎君を待つの禮を失ふ。今や郎君笈を負ひ、良師に従ひ、賢達に接し、且つ有為の邦国に生れ…郎君郎君、猶何為れぞ、悲憤の色を帯び、眉宇を開かざる。妾等の過、實に深し。郎君幸に寛容せよと、慰諭懇到、情義色に溢る。紅蓮。范卿も亦進で罪を乞ふ。

范卿は幽蘭の要望に応じて自分の悲惨な生い立ちや経歴を話したのだが、話が終わった後に、幽蘭は范卿に同情を示さず、一つの言葉もなしに、完全に范卿の話を無視したようである。その代わりに、散士に対して延々と話をした。話の一部しか引用しなかったが、主に散士へのお詫びと日本を褒め立てる話である。このような反応は文脈的にも感情的にもごく不自然なものに感じられる。

散士の訪問の後に、范卿は舟で散士を送る。舟中、「范卿は棹を休め流に任し

蹄水を下り、共に東洋の衰退を憤り、興亜の策を論ず」。散士は興亜の策について、以下のように言っている。

引用８　余、清朝を東に遷し、四百余洲を三分し、競争の志気を振起し、鴉片の鴆毒を禁絶せば、清人の元気を擡揮し、英人が兵威を頼で印度を圧制するの財源は涸れん、是れ興亜の端緒なるべしと。

散士の考えについて、范卿は「是れ僕が胸中の密計、先生と符合す」とのように、ちょうどそれは自分も心の中でひそかに考えているものだと賛成している。范卿は「反清復明」の志士であるため、「清朝を東に遷し」ということに賛成するのは理解し難くないが、「四百余洲を三分し」ということについて、愛国志士の中国人としては、自分の国の国土を三分するというのは売国奴の所業ではないだろうか。それに、終始「反清復明」の夢を抱いている志士として、いかなる手段で明朝を恢復するかということよりも、「興亜の策」に関心を払っていることにも違和感を禁じえない。

また、引用９のように、范卿が散士に献策し、興亜の計略として、日本がいかに清朝を打ち潰し、東洋盟主の實権を握るようになることについて論じた内容もある。

引用９　然らば則ち餘す所は、北洋の一隊丁汝昌のみ。貴国の艦隊を以て之に當る、優劣比較、何の難きことか之れあらんや。朝鮮を懐け清国を拉き、凱歌振旅、威名五洲に轟き、勇武四海に震ひ、始めて歐人の為めに敵憚せられ、東洋盟主の實権を握り、興亜の大計を建つる真に此時を然りとす。老奴又此機を利用し、先朝を恢復し三分の計を講じ、宗廟の祭を再興せんこと、畢生の素願なり。

第四巻において、ある日、突然幽蘭の父が捕縛された情報が届き、それを知っ

た幽蘭が一人で父を救おうとした際に、紅蓮と范卿はそれに同意せず、三人で一緒に行くべきだと幽蘭を説得しようとする場面が引用10のように描かれた。

引用10　范卿勃然として怒り、進て妾に謂て曰く、異なる哉、紅蓮女史の言や。各は主たり僕たりと雖も、一たび互に心膽を吐てより交情豈深淺あらんや。今や或は生を捨てゝ孝道を盡さんと欲し、或は死を取て友誼を全ふせんと欲す、之を聞くもの誰か奮起せざらんや。孔子曰く見義不為無勇也、孟子曰く捨生取義と。僕にして此行に随ふなくんば、平生誦する所聖賢の教に恥づる勿からんや。又何を以て齊魯奇節の人、燕趙悲歌の士を見んや。況や他日東海の郎君再び訪ふの日必ず老奴を賤み謂はん、果して怯懦の匹夫のみ、貪慾の老奴なり、又尋常清人に異ならずと。

この部分の内容からは、范卿は大いに義や友誼を重視することがわかる。「又尋常清人に異ならずと」という言葉から、范卿は自分のことを尋常の清人ではないと考えているとのような作者の設定が読み取れる。

以上で分析してきたように、この小説の時代に、アメリカにおける清人の地位は非常に低く、常に欧米人に蔑視され、差別される。このような状況を背景に、東海散士は『佳人之奇遇』に范卿という登場人物を作ったのである。小説において、范卿は幽蘭と紅蓮の召使で、地位の低い人物だが、尋常の清人とは異なり、義や友誼を重視する。反清復明という「正義」の役割を演じることを設定された人物である。しかしながら、これらの設定には、中国人登場人物として読者に違和感を起こさせる箇所や、文脈から見て不自然な箇所も存在する。

これらの内容は訳文でどのように翻訳されたのか。前文で紹介したどおり、翻訳者梁啓超は清末から民初にかけての政治家、思想家で、清朝の人として、政治家として、彼は原作者の設定した中国人登場人物をどのように翻訳したのか、次は訳文において、范卿についてどのように中国の読者に伝えられたのかについて見てみたい。

三　訳文における范卿

原文における范卿の登場はすでに紹介したが、訳文において、范卿の登場場面がどのようになっているのかについても見てみよう。

引用11　訳文：幽蘭掉頭微笑，目送散士者久之，范卿者支那志士也，憤世易俗，遜跡江湖，與散士交最契，過從甚密，久耳幽蘭紅蓮之名，散士此行，早約艤舟相待，至則范卿已久待河邊，一見各相行禮，散士登舟，二妃曰郎君珍重，散士脱帽曰，必重相見，由是遂別，散士回顧者數次。

（幽蘭は頭を振り返って笑い、久しく散士を見送った。范卿という者は支那の志士であり、世を憤慨し、俗を変え、江湖に跡を隠遜す。散士との交際は意気投合で、甚だ親密である。幽蘭紅蓮の名を聞くが久しく、散士今回の訪問の前に約束をし、舟で待つ。散士は舟についた際に、范卿は已に河の近くで長く待ち、会うとお互いに挨拶する。散士は舟に登り、二妃は郎君珍重と言い、散士帽を脱して、必ずまた会いましょうと言う。これでお互いに別れ、散士は數回回顧した）[2]

原文：幽蘭頭を掉て微笑するのみ。范卿舟を艤して待つ久し。散士禮して而して舟に上る。二妃呼で曰く郎君珍重必ず再訪せよと。散士帽を脱して曰く、必ず重ねて相見んと。范卿纜を解き棹を執る。散士回顧するもの數回、遥に二妃の白巾を揮て遠く相招き、空しく柳樹の下に立つを見るのみ。范卿棹を休め流に任し蹄水を下り、共に東洋の衰退を憤り、興亜の策を論ず。

引用11の内容を日本語に翻訳して原文と比較してみると、非常に大きな違いが出る。表でまとめると下記のようになる。

関連内容	原文	訳文
登場位置	巻一の最後	第二回の最後
名字	鼎泰璉范卿	范卿
先祖	鼎璉	関連内容なし
反清運動	瞿式耜、史可法、鄭成功など	関連内容なし
清軍の侵略・残酷	詳しく描く	関連内容なし
父	英軍との戦いで犠牲	関連内容なし
姉	清軍に殺された	関連内容なし
身分	反清復明の志士	隠士
社会地位	幽蘭・紅蓮の召使	散士の友達

まずは小説における登場の位置について、原文には巻一の終わりの部分に登場し、幽蘭、紅蓮と散士と一緒に話をしたが、訳文では第二回の最後の部分に、散士の訪問の後に登場したのである。つまり、訳文では范卿は幽蘭、紅蓮と散士と一緒に話をする機会すら与えられなかった。原文において范卿の名前は鼎泰璉で、字は范卿であるが、訳文においては、鼎泰璉という名前に言及しなかった。ただの名前であるが、原文においてはこの名前を通して范卿を反清復明の名臣の瞿式耜と関連づけ、反清の話に進んだので、范卿の名前に言及しないことは、范卿の明朝、清朝との関係を切ることになり、范卿の本当の身分を隠す手段になる。

范卿の先祖の鼎璉、反清復明の名臣たちなども訳文では言及されない。原文では清の軍隊が明を侵略する内容について詳しく描かれたが、訳文では全部削除された。また、范卿の父と姉の死についても訳文では紹介されなかった。その代わりに、引用11で示しているように、范卿の身分については原文にない内容が訳者によって追加されている。訳者の処理によって、范卿は「反清復明」の夢を抱いている志士から隠士に変貌し、幽蘭・紅蓮の召使から散士の友達になった。

前述したように、原文には范卿と散士と一緒に興亜の策について論じた場面がある。この部分の内容も訳文において改作され、范卿のイメージを変化させ

た。

引用12　訳文：夫支那之在大地、統四百余洲、実為宇内一大邦域。徒以内政不修、外交不講、至累受挫辱、莫能自振。果能禁絶鴉片之鴆毒、振起国民之精神、是可為興亜之第一策也。

（支那は四百余洲を統治し、実に宇宙内の一つの大きな邦国である。但し内政を修まらず、外交を講ずることができず、累次に挫折と侮辱を受け、自ら振興できないことに至った。果して鴉片之鴆毒を禁ずることができ、国民の精神を振起させることができれば、これこそ興亜の第一策と為る。）

原文：余、清朝を東に遷し、四百余洲を三分し、競争の志気を振起し、鴉片の鴆毒を禁絶せば、清人の元気を擢揮し、英人が兵威を頼で印度を圧制するの財源は涸れん、是れ興亜の端緒なるべしと。

范卿の賛成する散士の言っている興亜の策は、訳者は果して忠実に翻訳しなかった。原文における散士の「余、清朝を東に遷し、四百余洲を三分し、競争の志気を振起し」という話は、訳文で「支那は四百余洲を統治し、実に宇宙内の一つの大きな邦国である」となった。このように、訳文で散士の話を書き換えることによって、原文における范卿の賛成する散士の言っている興亜の策の内容が中国に有利な内容に変わった。原文において、范卿は散士の言論の支持者であるが、訳文での書き換えによってこのような設定が崩れてしまった。その代わりに、訳文では、范卿は訳者が自ら書き換えた散士の話の支持者になった。このように、原作者に一度利用された范卿は訳者に再利用されることになる。

四　終わりに

以上で考察してきたように、原文において作り上げられた范卿という中国人物は、社会地位の低く、尋常の清国人とは異なる優れる品格を持つ人物である。

しかしながら、名前の設定において、中国の習慣を違反し、日本の要素が含まれていることがわかる。また、明朝遺臣という身分の設定においても筋の通じない点がある。

訳文においての范卿の人物像は大きな変容を遂げた。それによって、訳文の読者と原文の読者が受け取るこの小説の内容はかなり違うものだと容易に想像できるだろう。このようなことは訳者による削除や改作などの翻訳という手段によって実現されたのであると言えよう。

翻訳する時、どのようなテクスト、言語でもそのまま逐一置き換えることはできないが、原文に忠実にそのまま翻訳するのではなく、このように多く改作を行うのは適切だろうか。どのような翻訳が良い翻訳なのか、様々な定義や評価基準がある。読者への配慮は、范卿のイメージが変わった原因の一つになっていると考えられるが、訳者の主体性という要素にも注意すべきであろう。梁啓超は『佳人之奇遇』の訳序で述べたように、彼が『佳人之奇遇』を翻訳するのは、政治小説を利用し、国民への思想的啓蒙を図っているためである。故に、彼は翻訳という手段を通し、范卿という人物について改作を行い、不都合な原作の人物を美化した後に再利用して、自分の目的を達成させているのではないだろうか。

【注】

1　愛蘭島人のことを指す。
2　翻訳は筆者による。以下同。

参考文献

王俊淵　談中国人姓名中的避諱　中国校外教育　2010
夏暁紅　覚世与伝世 ── 梁啓超的文学道路　上海人民出版社　1991
許常安 「清議報」登載の「佳人之遇」について ── 特にその改删　大正大学研究紀要57　1972
木村益夫　梁启超及び＜佳人奇遇＞．人文論集第11巻　1964　103-133
朱琳　天儒夹縫中的南明重臣瞿式耜研究　上海師範大学　2018
『清議報』　中華書局　1991
張敏　中日姓名之比較　商業文化（学術版）　2009
陳時龍　瞿式耜的軍事思想　中国明史学会会議論文集　2015

『明治大正文学全集』第一巻　春陽堂　1932
平子義雄　翻訳の原理 ── 異文化をどう訳すか　大修館書店　1999
柳田泉　明治文学研究・第八巻：政治小説研究　春秋出版社　1967
梁启超　飲氷室合集第11冊専集之八十八　中華書局　1989
盧守助　梁啓超訳『佳人之奇遇』及びその周辺　環日本海研究年報　n.20　2013.3

＊討論要旨

谷川恵一氏は、范卿の話を聞いて幽蘭が冷たく無視したという解釈について、原文では無視したと直接は読めない気がするため、幽蘭の反応についてもう少し丁寧な説明がほしいと述べた。また、「清人」という表現について、『佳人之奇遇』は支那や中国といった言葉は使わない傾向にあり、梁啓超はそれと違うタームでこの語を使っていることに触れ、これは民族問題的な要素がある可能性、すなわち清朝の支配民族としての清人と漢民族とを『佳人之奇遇』は恐らく区別して書いていると考えられる一方、梁啓超の翻訳はそれと異なっているのであり、その点を明確にした方が良いのではないかと質問した。発表者は、范卿が自分の生い立ちについて話したのは幽蘭の要望に応じる形だったにも関わらず、幽蘭は自分の聞きたかったことに何の反応も示さず、むしろ感動して泣いた東海散士を慰めていることから、清人よりも日本人を重視しているように感じたため、差別化されていると思う、と回答した。それを受けて谷川氏は、『佳人之奇遇』は侵略してきた清朝と明、という対立軸で作品を書いていることからすると、「清人」はナショナリティではなく、民族の問題の可能性があると感じたので、その辺りを整理した方が良いのではないか、と改めて指摘した。